（2）拙稿「『後拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」『城西大学女子短期大学部紀要』一二巻一号、平成七年一月）。
（3）国語学会編『国語学大辞典』（昭和五五年九月、東京堂出版）「詞書・左注」の項（井出至氏執筆）。
（4）「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』八七集、昭和四六年一二月）。
（5）拙稿「『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一〇月、桜楓社）。
（6）拙稿「『新勅撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』一九巻一号、平成一四年三月）。
（7）犬養廉氏他編『和歌大辞典』（昭和六一年三月、明治書院）の「九月十三夜」「八月十五夜」の項（滝沢貞夫氏執筆）。
（8）久松潜一・西尾實氏校注『歌論集　能楽論集』（日本古典文学大系65　昭和三六年九月、岩波書店）。
（9）「八代集に於ける『隠る』『失す』『亡くなる』について」（『桜文論叢』六五巻、平成一八年一月）。
（10）拙稿「『後葉和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』一一巻一号、平成六年一月）。

本　文

語彙調査や引用に使用した本文は、「古今詞書」は佐伯梅友氏校注『古今和歌集』（日本古典文学大系8　昭和三三年三月、岩波書店。底本は、二条家相伝本）、「後撰詞書」は大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』（昭和四〇年一二月、大阪女子大学）の本文編（底本は、高松宮家蔵天福二年本）、「拾遺詞書」は片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究　伝本・校本篇』（昭和四五年一二月、大学堂書店）の主底本（底本は、京都大学付属図書館蔵中院通茂筆本）、「後拾遺詞書」は川村晃生氏校注『後拾遺和歌集』（平成三年三月、和泉書院。底本は、宮内庁書陵部蔵『後拾遺和歌抄』〈四〇五・八七〉）、「金葉詞書」は川村晃生・柏木由夫・工藤重矩氏校注『金葉和歌集　詞花和歌集』（新日本古典文学大系9　平成一年九月、岩波書店。底本は、ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本）、「詞花詞書」は松野陽一氏校注『詞花和歌集』（昭和六三年九月、和泉書院。底本は、陽明文庫蔵伝為広筆本）、「千載詞書」は久保田淳・松野陽一氏校注『千載和歌集』（昭和四四年九月、笠間書院。底本は、静嘉堂文庫蔵伝冷泉為秀筆本）、「新古今詞書」は久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎氏校注『新古今和歌集』（日本古典文学大系28　昭和三三年二月、岩波書店。底本は、小宮堅次郎氏蔵本）、「新勅撰詞書」は滝澤貞夫氏編『新勅撰集総索引』（昭和五七年一〇月、明治書院）の底本（冷泉家旧蔵伝為家筆定家自筆識語穂久邇文庫蔵本）、「続後撰詞書」は『新編国歌大観　第一巻』（昭和五八年二月、角川書店）所収本（底本は、宮内庁書陵部蔵A本〈四〇五・八八〉）、「続古今詞書」は『新編国歌大観　第一巻』（昭和五八年二月、角川書店）所収本（底本は、尊経閣文庫蔵伝藤原為氏筆鎌倉時代写本）。傍線筆者、引用の後の（　）内の数字は、引用本文の歌番号（「詞花詞書」は、底本の一連番号）を示す。また、引用に当たって、漢字の字体は現行のものに改めた。

付記　本稿は、日中言語文化国際共同シンポジウム（解釈学会・中国社会科学院外国文学研究所共催　二〇〇六年八月二日・三日、於北京）における口頭発表をもとに、加筆・訂正したものである。

パーセント、延べ語数で一九・九パーセントとなる。「三代集詞書」におけるそれらと比較すると、異なり語数で一七・〇ポイント、延べ語数で八・四ポイント高く、その差は歴然としている。また、「二条家詞書」と「新古今詞書」とを比較しても、その差は目につくが、それが、時代が下るにしたがって漢語の比率が高まるという語彙の一般的な傾向の枠内のものであるかどうかは必ずしも明確ではない。

2　品詞別構成比率からみて、「三代集詞書」と比較した場合の「二条家詞書」における名詞の比率の高さ、動詞の比率の低さは、「二条家詞書」を動きの少ない、固定的、類型的なものにしていると言えそうである。

3　「二条家詞書」における連体詞「ある」の使用例の少なさは、三代集と比較した場合の二条家三代集における詠者名の匿名性の希薄化の結果であると言える。

4　「二条家詞書」における「ひやくしゆ」「じつしゆ」「ごじつしゆ」「せんごひやくばん」の頻用は、撰者の撰歌方針の結果である。また、それらの語は、平安末期からの定数歌の隆盛という和歌史の流れを踏まえた、ある種の時代語とでも言えるものである。

5　「二条家詞書」における「めいしよ」の頻用は、時代の嗜好を踏まえた二条家三代集の担い手である定家や為家らの撰歌の結果であり、その点からすると、「めいしよ」は、「二条家詞書」の特徴的使用語であるとも言える。

6　「二条家詞書」における「じふさんや」の頻用は、先に挙げた「めいしよ」同様、時代の嗜好を踏まえた俊成を始めとする二条家三代集の担い手の撰歌の結果である。詠歌の場や時の明示に使用された「じふさんや」に対する嗜好からすると、この「じふさんや」は、「二条家詞書」の特徴的使用語であるとも言える。

7　「二条家詞書」における「しゆつくわい」の頻用は、結び題の盛行や、撰歌資料としての「長秋詠草」の重視の結果である。と同時に、「毎月抄」の記述などから考えると、この「しゆつくわい」という語は、「二条家詞書」を特徴づける語であるとも言える。

8　「二条家詞書」における「死」に関する表現は、「みまかる」とともに、忌詞的性格の強い「かくる」を中心に使用するという編集方針によっていたようである。

9　「二条家詞書」における「よす」の頻用は、中世における恋歌や結び題の隆盛の結果であろうが、「二条家詞書」の特徴的使用語でもある。

おおむね、以上のような点が指摘できよう。しかし、比率や使用度数が何を意味しているか、必ずしも明確にすることが出来なかった。この点、方法論を含めて今後とも検討していきたい。

注

（1）『古典対照語い表』の統計表（3）「語種別統計」参照。

のように「…によせて…」とするものである。残りの五例中三例は、

例42　五十首歌たてまつりしに、寄雲恋（一〇八一）

のような「恋」に関する寄物題で、他の二例は、「懐旧」に関する寄物題で、それぞれ使用されている。

「新勅撰詞書」には、九例の使用例があるが、

例43　観音院に御封よせさせ給ける時の御歌（五八五）

という一例を除き、他の八例は、

例44　入道二品親王家に五十首歌よみ侍けるに、寄煙恋（六八七）

のような「恋」に関する寄物題で使用されている。

「続後撰詞書」では、

例45　入道前摂政家恋十首歌合に、寄網恋（七五七）

のような「恋」に関する寄物題で三六例、

例46　…来迎院にて、寄老人述懐といふことをよみ侍りけるに（一一二〇）

例47　寄月祝といへる心を（一三六一）

のような「述懐」「祝」に関する寄物題で、それぞれ三例使用されているほか、

例48　大日経、所畏、故能究竟心無、浄菩提心のこころを月によせてよみ侍りける（六一七）

のような使用例もある。

以上、「よす」の使用実態について具体的にみてきたが、ここでそれをまとめると、

1　いわゆる寄物題およびそれに類するものでの使用例は、「後拾遺詞書」から出現するが、頻用されるのは「金葉詞書」あたりからである

2　寄物題で使用される「よす」は、「新古今詞書」においても頻用されるが、特に「二条家詞書」においてそれが目立つ

3　「よす」は、「恋」に関する寄物題において頻用される

のような点が指摘できよう。特に、3に関しては、「二条家詞書」と「三代集詞書」との間に大きな相違があり、注目される。

筆者は、「後葉和歌集」の「詞書」における「こひ（恋）」の頻用について、恋歌の隆盛という和歌の史的展開と関連づけて考えたことがある。[10]「二条家詞書」における「よす」の頻用は、上に述べた恋歌の流行とともに、中世における結び題の隆盛が相俟った結果であろうが、それは同時に、「二条家詞書」の特色の一つとも言えるものであろう。この点、先にみた「二条家詞書」と「新古今詞書」における「よす」の使用差がその傍証となろう。

六

以上、二条家三代集の「詞書」に使用された自立語語彙の使用実態について、主として三代集の「詞書」におけるそれと比較してみてきた。以下、その要点を再掲し、まとめとしたい。

1　「二条家詞書」における漢語の比率は、異なり語数で三一・一

る。つまり、「新古今和歌集」や「続古今和歌集」が二条家三代集（「新古今和歌集」の場合は、「千載和歌集」）の撰集方針を必ずしも踏襲していない証左となるし、またそれは、「二条家詞書」における「死」に関する表現は、「みまかる」とともに、より忌詞的性格の強い「かくる」を中心として使用するという撰集方針であった証左ともなるであろう。なお、なぜ二条家三代集において、より忌詞的性格の強い語が使用されたかについては、今後とも考えたい。

3

次に、「よす（寄）」についてふれる。

表9は、八代集の「詞書」、「新勅撰詞書」「続後撰詞書」に使用された「よす（寄）」の使用度数と、各「詞書」における使用率をまとめたものである。以下、具体的にその使用実態をみる。

「後撰詞書」には、

例33　…御帳のめくりにのみ人はさふらはせたまうて、ちかうよせられさりければ（六八三）

のような使用例が二例ある。また、「後拾遺詞書」には、

例34　うへのをのこどもうたよみ侍けるに、春心花によすといふことをよみはべり（九五）

のような、いわゆる寄物題に類した使用例がある。また、「金葉詞書」には、

例35　寄水鳥恋といへることをよめる（三六四）

表 9

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰
よす	0	2	0	1	8	2	11	9	9	43
使用率（%）	0.000	0.029	0.000	0.011	0.190	0.075	0.157	0.113	0.178	0.869

のような寄物題での使用例が八例あり、それらはいずれも「恋」に関するものである。また、「詞花詞書」には、

例36　神祇伯顕仲ひろ田にて哥合し侍とて、寄月述懐といふ事をよみてとこひてはべりければつかはしける（三四三）

のような「述懐」に関する寄物題での使用例と、

例37　所所の名を四季によせて人人哥よみ侍けるに、みしま江の春の心をよめる（二六八）

のような使用例がある。

「千載詞書」での一一例は、すべて寄物題での使用例で、

例38　寄浦恋といへる心を詠める（八七七）

のような「恋」に関するものが九例あるほか、

例39　寄霞述懐の心を詠める（一〇六一）

例40　寄月念極楽といへる心を詠み侍ける（一一〇五）

のような使用例もある。

「新古今詞書」での使用例九例中、寄物題およびそれに類した使用例は七例ある。うち二例は、

例41　述懐によせて百首歌よみ侍りける時（一二一一）

2

「死」を意味する表現として、「二条家詞書」には「かくる（隠）」が頻用されている。

表8は、八代集の「詞書」、「新勅撰詞書」「続後撰詞書」「続古今詞書」に使用された「かくる」と、同様に「死」を意味する「うす（失）」「みまかる（身罷）」「なくなる（亡）」の使用度数を示したものである。この表8からは、「かくる」および「みまかる」の使用が非常に広範であることがわかる。また、「かくる」は、「千載詞書」以降、その頻用が目立つ点、「なくなる」は、「三代集詞書」および「後拾遺詞書」において頻用されるが、「金葉詞書」以降では、「新古今詞書」を除き、ほとんど使用されない点、「うす」は、「詞花詞書」以降では、「なくなる」と同様に「新古今詞書」を除き、ほとんど使用されない点などもみてとれる。これらのことから、「三代集詞書」では「なくなる」と「みまかる」が、また、「二条家詞書」では「かくる」と「みまかる」が好まれている点、「新古今詞書」では、「三代集詞書」において好まれた「なくなる」「うす」も例外的に頻用されている点が指摘できよう。「新古今詞書」において、「かくる」「みまかる」が「二条家詞書」と同様に頻用されているものの、「二条家詞書」においてほとんど使用されない「うす」「なくなる」も頻用されているという点には注意を要するであろう。つまり、「三代集詞書」において「なくなる」が、「二条家詞書」において「かくる」が、それぞれ頻用されていることについては、時代の尚好もあろうが、それのみに理由を求めることは出来ないということである。

ところで、小久保崇明氏は、八代集における「死」に関する婉曲的表現である「かくる」「うす」「なくなる」を考察し、「なくなる」→「うす」→「かくる」と、より婉曲度が高くなり、忌詞的性格が強いと結論づけられている[9]。この点を踏まえると、「二条家詞書」には、忌詞的性格が強い「かくる」が、「三代集詞書」には、それが比較的弱い「なくなる」が好んで使用されていることになる。このような使用差は、やはり撰集態度が反映された結果とみるのが妥当であろう。そのように考えると、定家が撰者の一人として加わった「新古今詞書」に「なくなる」が一〇例、「うす」が四例使用されている点や、為家が、為家に批判的な藤原光俊（真観）らとともに撰した「続古今詞書」に「うす」「なくなる」が各二例使用されていることも意味を持ってく

表8

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今
かくる	3(3)	4(3)	3(1)	9(1)	6	3	21(1)	17	11	6	12
うす	1	2(1)	4	15	3	0	0	4	0	0	2
みまかる	18	13	1	21	3	7	21	26	12	12	17
なくなる	2	7(1)	17	14	0	0	2	10	0	0	2

＊注　（　）内は，うち「死」以外の意味の用例数

の、他はおおむね「千載詞書」での使用実態と同様である。

以上、「しゆつくわい」の使用実態を具体的にみてきたが、その用法をまとめたものが表7である。この表7からは、

1　「千載詞書」以降、「新古今詞書」を除き、結び題としての使用例が複数ある

2　「述懐の心」という使用例が「新古今詞書」に多く、対して「述懐の歌」という使用例が「二条家詞書」に多い

3　「述懐百首歌」という使用例が「千載詞書」「新古今詞書」にあるなどがわかる。

3に関しては、その多くが「長秋詠草」から採歌されたものであり、撰歌資料としての「長秋詠草」の重視を、その因としている。また、1に関しては、結び題の盛行という和歌史の流れからして当然とも言えるものではあるが、「二条家詞書」よりも「新古今詞書」においてそれが少ない理由に関しては、必ずしも明確ではない。あるいは、2とも関係するかもしれないが、この点に関しては今後の課題としたい。

表7

	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰
結び題	0	1	3	1	3	4
…の心	1	0	4	7	5	2
…の歌	0	1	13	1	9	4
歌題	0	0	0	1	1	1
述懐百首歌	0	0	2	6	0	0

ところで、「毎月抄」には、

又、恋・述懐などやうの題を得ては、ひとへにたゞ有心の躰をのみよむべしとおぼえて候[8]

という記述がある。ここでは「述懐」が「有心」と結びつけられており、俊成・定家ら二条家三代集の担い手にとって「述懐」は、重要な意味を持つものとなっている。この「しゆつくわい」は、表6をみてもわかるように、中世和歌史上の重要な用語であり、その点からすれば、時代語とでも言うべきものである。しかし、同時に、「毎月抄」における記述や、「二条家詞書」における頻用からすると、この「しゆつくわい」は、二条家三代集を特徴づける語であるとも言え、その重要性が結果的に「二条家詞書」における「しゆつくわい」頻用につながったと言える。

五

1

次に、非共通基幹語のうち、「三代集詞書」においても使用例があるものについてみることにする。ここに所属するのは、表3において「非共通基幹語」とする六〇語のうち、四―2で示した一八語を除いた四二語である。以下、いくつかの語について具体的にふれたい。

に「じふさんや」が頻用されたと言えそうである。

5

次に、「しゆつくわい（述懐）」についてふれたい。

表6は、八代集の「詞書」、「新勅撰詞書」「続後撰詞書」に使用された「しゆつくわい」の使用度数と、各「詞書」における使用率をまとめたものである。この表6を一瞥すると「しゆつくわい」は、主として「千載詞書」以降で使用される中世的な語であり、しかも使用率からは、「二条家詞書」と「新古今詞書」との間に、相当大きな差があることがわかる。以下、具体的にみると、「金葉詞書」には、

例24　百首歌中に述懐の心をよめる（五九五）

のような使用例が、「詞花詞書」には、

例25　神祇伯顕仲ひろ田にて哥合し侍とて、寄月述懐といふ事を…（三四三）

のような結び題での使用例と、

例26　新院位におはしましし時、うへのをのこともをめして述懐の歌よませさせ給けるに…（三七三）

のような使用例がある。

「千載詞書」には、

例27　年頃修行にまかり歩きけるが、帰りまうで来て、月前述懐といへる心を詠める（九九二）

のような結び題での使用例が、計三例、「金葉詞書」における例24と同様な、

例28　…百首歌奉りける時、述懐の心を詠める（一〇二二）

のような「述懐の心」とする使用例が、計四例、「詞花詞書」における例26と同様な、

例29　賀茂の社の歌合に、述懐歌とて詠める（一一四三）

のような「述懐（百首）歌」とする使用例が、計一五例（うち二例は「述懐百首歌」）ある。また、「新古今詞書」においても、「千載詞書」における使用実態とほぼ同様で、結び題中での使用例が一例、「述懐の心」とする使用例が七例、「述懐の歌」という使用例が一例、「述懐の百首歌」とする使用例が六例、それぞれあるほか、

例30　述懐によせて百首歌よみ侍りける時（二二一）

のような使用例もある。なお、「新勅撰詞書」には、

例31　百首歌の中に述懐（一一三五）

のような、「続後撰詞書」には、

例32　権僧正円経すすめ侍りける春日社名所十首歌に、述懐（一一六七）

のような、独立した歌題としての使用例もあるもの

表6

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰
しゆつくわい	0	0	0	0	1	2	22	16	18	11
使用率（%）	0.000	0.000	0.000	0.000	0.024	0.075	0.314	0.201	0.356	0.222

れる。

筆者は、かつて「新勅撰詞書」における「めいしよ」の頻用について、

平安中期以降の名所歌合の流行、それに続く名所題百首歌の出現など、時代の嗜好を踏まえた撰者定家の撰歌の結果とも言えるものであろう[6]

としたが、「二条家詞書」における「めいしよ」の頻用は、時代の嗜好であるとともに、定家や、その詠風を継いだ為家の嗜好でもあった。このような意味で、「めいしよ」は、「二条家詞書」の特徴的使用語であると言えそうである。

4

次に、「じふさんや（十三夜）」について、「じふごや（十五夜）」と比較することによりふれたい。

歌題としての「じふさんや」「じふごや」は、勅撰集にほとんどみられず[7]、その用例の多くは、

例20　後冷泉院の御時、九月十三夜月の宴侍けるに、詠み侍ける
（「千載詞書」三三五）

例21　九月十三夜十首歌合に、おいののちはじめてめしいだされて、名所月といへることを（「続後撰詞書」一〇七三）

例22　八月十五夜、和歌所にて、月前恋といふことを
（「新古今詞書」一二八二）

例23　延喜御時、八月十五夜月宴歌
（「新勅撰詞書」二五四）

のように、詠歌の場や時の明示に使用されている。

表5は、八代集の「詞書」、「新勅撰詞書」「続後撰詞書」、および、「続古今和歌集」の「詞書」（以下、「続古今詞書」と略称する）における「じふさんや」「じふごや」の使用度数である。この表5から「じふさんや」は、中世になって比較的使用されるようになる点、「じふごや」は、八代集において広く使用されている点などがみてとれるであろう。また、注意を要するのは、「千載詞書」においては、「じふさんや」のみ使用し、反対に、「新古今詞書」においては、「じふごや」のみ使用している点である。このことからすると、月に対する撰者の嗜好が、「千載和歌集」と「新古今和歌集」との間で微妙に相違しているとも考えられる。なお、表5からは、「新勅撰詞書」においては、「じふごや」が多く、「続後撰詞書」や「続古今詞書」では、「じふさんや」が再逆転していることもわかるが、これらを併せて考えると、詠歌の場や時としての「じふさんや」に対する嗜好は、二条家三代集における特色と思われ、その結果として「二条家詞書」

表5

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今
じふさんや	0	0	0	1	1	1	3	0	1	16	10
じふごや	0	2	4	4	5	2	0	8	3	9	6

やうじ（法性寺）」も、三代集成立以後の人物に関するものであり、当然のことながら「三代集詞書」には使用され得ないものである。以上の語以外に、この一八語の中には、問題になりそうな語が散見するので、以下、いくつかふれたい。

3

表4は、八代集の「詞書」、および、「新勅撰詞書」「続後撰詞書」における定数歌に関する「ひやくしゅ（百首）」「じつしゅ（十首）」「ごじつしゅ（五十首）」「せんごひやくばん（千五百番）」の使用度数をまとめたものである。この表4からすると、「ひやくしゅ」を除き、平安時代末期からの定数歌の隆盛と、それらの歌合を重要な採歌資料とした結果、「二条家詞書」や「新古今詞書」において頻用されたことがわかる。したがって、「二条家詞書」におけるこれらの語の頻用は、撰者の撰歌方針の結果であり、これらの語は、ある種の時代語とも言えるものである。この点、「二条家詞書」における「めいしよ（名所）」の頻用も同様な理由によると思われるので、以下、「めいしよ」についてふれる。

「めいしよ」は、「二条家詞書」において四一例（「新勅撰詞書」一三例、「続後撰詞書」二八例）使用されている。また、「新古今詞書」においても一例使用されているが、それは、

例13　教長卿、名所歌よませ侍りけるに（一六〇七）

というものである。

表 4

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰
ひやくしゅ	0	0	4	1	23	15	157	192	118	123
じつしゅ	0	0	0	0	6	1	10	8	11	60
ごじつしゅ	0	0	0	0	0	0	0	64	17	20
せんごひやくばん	0	0	0	0	0	0	0	56	18	12

「新勅撰詞書」においては、「新古今詞書」と同様な、

例14　名所歌たてまつりける時、あしや（一二八四）

のような使用例や、

例15　名所百首歌たてまつりける時よめる（一二九七）

のような使用例とともに、

例16　前関白家歌合に、名所月（一二七七）

のような歌題中での使用例も、計七例みられる。また、「続後撰詞書」においても、

例17　名所歌たてまつりける時（一三四）

のような、「新古今詞書」と同様な使用例や、

例18　春日社にて名所歌十首歌人人にすすめてよませ侍りける時、花を（九九）

のような使用例とともに、

例19　建保三年内大臣家の百首歌に、名所花（六五七）

のような歌題中の使用例も、計一一例みら

ここで基幹語とするのは、「三代集詞書」および「二条家詞書」における延べ語数の、おおむね一パーミル以上の使用度数（「三代集詞書」一六、「二条家詞書」一七）を持つ語で、「三代集詞書」においては、異なり語数で一五三、延べ語数で一〇三五三、「二条家詞書」においては、異なり語数で一四三、延べ語数で一二〇三一である。

表3は、「二条家詞書」の語彙および「三代集詞書」の語彙を、それぞれ累積使用率によって一〇段階に分け、「二条家詞書」および「三代集詞書」の基幹語彙に関する部分のみ抜き出し、前者を基準として、各段階における異なり語所属語数を示したものである。なお、「非共通基幹語」としたのは、「二条家詞書」における基幹語彙のうち、「三代集詞書」に使用例がないもの、および、使用例はあるものの、「三代集詞書」の基幹語彙ではないものである。なお、この表3から、「二条家詞書」の特徴的使用語を抽出するに当たり、その所属段階差が上、下各二段階以上ある語、および、非共通基幹語をもって「二条家詞書」の特徴的使用語とした。上のようなものを特徴的使用語とすると、それは、「二条家詞書」における②段階に一語、③段階に三語、④段階に二語、⑤段階に一〇語、⑥段階に二一語、⑦段階に四五語、⑧段階に九語の、計九一語となる。

2

非共通基幹語は、表3でわかるように、異なり語数で六〇語ある。うち、「三代集詞書」において使用されていないものは、

表3

	共通基幹語	「三代集詞書」の語彙における所属段階							非共通基幹語
		1	2	3	4	5	6	7	
1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
2	3	0	1	1	0	1	0	0	0
3	3	2	0	1	0	0	0	0	1
4	6	1	0	1	2	2	0	0	1
5	15	0	3	4	2	4	2	0	3
6	19	0	0	0	5	7	4	3	16
7	35	0	0	0	5	9	15	6	31
8	1	0	0	0	0	0	1	0	8
計	83	4	4	7	14	23	22	9	60

じつしゅ（十首）・ほりかはゐん（堀川院）・くわんぱく（関白）・けんぽう（建保・年号）・ごじつしゅ（五十首）・しゅつくわい（述懐）・めいしょ（名所）・いはひ（祝）・きうあん（久安・年号）・じふさんや（十三夜）・じゆだい（入内）・すとくゐん（崇徳院）・せんごひやくばん（千五百番）・ないだいじん（内大臣）・ほふしゃうじ（法性寺）・ろくねん（六年）・くさ（草）・しか（鹿）

の一八語である。うち、「きうあん（久安）」「けんぽう（建保）」という二語は、平安時代末期以降の年号であり、三代集成立時には存在し得ないものである。また、人物に関する「ほりかはゐん（堀川院）」「すとくゐん（崇徳院）」「ほふし

用されている。

「拾遺詞書」には、詞書で一五例、左注で一例の、計一六例使用されているが、

例9　ある人のうふやにまかりて（二七〇）

例10　五月五日ある女のもとにつかはしける（七六七）

のような、「ある人」とする四例、「ある女」とする一例を除き、比較的長い「詞書」において使用されている。なお、一六例中八例は「よみ人しらず」歌、または、詠者名を欠く和歌の「詞書」で使用されている。

以上、「三代集」における「ある」の使用実態を具体的にみたが、それによれば、

1　説明的な、比較的長文の「詞書」において使用されることが多い

2　左注においても使用される

3　詠者名を記さないもの、または、「よみ人知らず」とするものが比較的多い

のような点が指摘できよう。では、「二条家詞書」における「ある」は、いかがであろうか。以下、具体的にみたい。

「千載詞書」の使用例は、

例11　服に侍りける時、或る上人の来れりけるが、墨染の袈裟を忘れて取りに遣したりける、遣すとて詠める（五八〇）

というもの。また、「続後撰詞書」の使用例は、

例12　円盛法師てならひして侍りける障子を、あるところよりたづねられけるつかはすとて（一一五一）

というものである。これらは、二例とも比較的長文の説明的な詞書において使用されたものであり、この点からすれば、「三代集詞書」での使用例と相違はない。ただ、使用例が少ないので確とは言えないが、左注での使用例がない点、二例とも詠者名が記された和歌の詞書で使用されている点では、「三代集詞書」の場合と相違がみられる。三代集と比較した場合、二条家三代集は、「よみ人知らず」歌や詠者名を記さない和歌が少ないが、このような詠者名の匿名性の希薄化が結果的に、事物を漠然とさす「ある」という語の減少につながったと考えられる。それは結局、「詞書」や詠者名表記における形式の統一を図ろうとする撰者の編纂・撰集方針の結果ということになるであろう。なお、「ある」以外の連体詞においても、「ある」の場合ほど極端ではないものの、「二条家詞書」における使用度数が「三代集詞書」におけるそれよりも少ない。これらの両者における相違も、「ある」の場合と同様の理由によると考えられる。

四

1

次に、「三代集詞書」と「二条家詞書」の基幹語彙を通して、「二条家詞書」の使用語彙の特徴について考えたい。

と、「千載詞書」において形容詞が多用されていることがわかる。また、「平安和文基本語彙」と共通するものは一〇語（うち、「千載詞書」単独使用語と共通するもの六語）、共通しないもの九語となる。したがって、「二条家詞書」にのみ使用された形容詞のうち、「平安和文基本語彙」と共通するものは約五三パーセントとなるが、この数値は、「三代集詞書」における同様な数値、約六三パーセントと比較し、注目に値する低さであることがわかる。

以上、形容詞に関してみてきたが、「三代集詞書」と「二条家詞書」とに共通して使用されている形容詞は、「平安和文基本語彙」との共通性が高く、また、実際の使用に当たっても、「詞書」としての要素に関わる、然るべきものであることがわかった。一方、「三代集詞書」と「二条家詞書」とに単独使用されている形容詞をみると、各作品の成立年代からして当然のことではあるが、「二条家詞書」に単独使用された形容詞の方が「三代集詞書」に単独使用された形容詞よりも、「平安和文基本語彙」との共通性が低いことも確認できた。なお、それぞれに単独使用された形容詞（群）をみると、複合したものが比較的多いという特徴はみうけられたが、両群の所属語には、必ずしも明確な差は見出しえなかった。

4

次に、形容語のうち、その使用が特徴的とも思える連体詞の「ある」についてふれたい。

「ある」は、「三代集詞書」に五五例（「古今詞書」に二六例、「後撰詞書」に一三例、「拾遺詞書」に一六例）、「二条家詞書」に二例（「千載詞書」「続後撰詞書」に各一例）、それぞれ使用されている。

「古今詞書」の二六例のうち二四例は、

例５　ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの哥也
（七、左注）

のように左注で使用されている。詞書での使用例は、

例６　女のおやのおもひにて山でらに侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりければ、返り事によめる（八四四）

と、他に一例あるのみである。また、ほとんどが「よみ人しらず」歌であり、「詞書」および詠者名がともに記されているものは、歌番号三五五の一首にすぎない。

「後撰詞書」には、

例７　おなし御時、みつし所にさふらひけるころ、しつめるよしをなけきて御覧せさせよとおほしくて、ある蔵人にをくりて侍ける十二首かうち（一九）

例８　ある所にすのまへに、かれこれ物かたりし侍けるをきゝて、うちより女のこゑにてあやしく物のあはれしりかほなるおきなかなといふをきゝて（一二七二）

のような用例が、計一三例あるが、いずれも詞書での使用例であり、説明的な、比較的長い詞書において使用されている。なお、一三例中八例は、「よみ人しらず」歌、または、詠者名を欠く和歌の詞書で使

けるそれらは、それぞれ一九語、二三語である。

共通する形容詞の中には、六作品に共通する

あかし（明・赤）・おなじ（同）・とほし（遠）・なし（無）・ひさし（久）

や、五作品に共通する

いたし（甚・痛）・おほし（多）・おもしろし（面白）・ちかし（近）・はかなし（果無）・ふかし（深）・ふるし（古）

なども属する一方、二作品にしか共通しない

したし（親）・たのもし（頼）・むつまし（睦）・よし（良・好）・よわし（弱）・わかし（若）

のようなものも属している。ここにあげた語の多くは、当然のことながら、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）[4]と共通する。と同時に、

例1　おなじ御時、きさいの宮の哥合のうた（「古今」一七八）

例2　四五月許、とをきくにへまかりくたらむとするころ、郭公をきゝて（「後撰」一七六）

例3　白河院花御覧じにおましましけるに、召しなかりければ、詠みて奉り侍りける（「千載」四三）

例4　永保二年二月后の宮にて、梅花久薫といへる心を詠み侍りける（「千載」一八）

のような使用例でわかるように、「詞書」に使用されるのも然るべきものと思われるものである。

次に、「三代集詞書」と「二条家詞書」に共通しない形容詞についてふれたい。

まず、「三代集詞書」に使用され、「二条家詞書」には使用されない形容詞をみると、ここに所属するのは、上記したように、異なり語数で四〇語、延べ語数で八三語である。ここで注意しなければならないのは、その多くが「後撰詞書」に使用されているということである。「後撰詞書」には、異なり語数で二九語使用されているが、うち、「古今詞書」「拾遺詞書」の両方、または一方にも使用されているものは五語であり、他の二四語は、「後撰詞書」における単独使用語である。なお、「古今詞書」単独使用語は五語、「拾遺詞書」単独使用語は五語となる。また、ここに所属する四〇語のうち、先の「平安和文基本語彙」と共通するものは二五語、共通しないものは一五語となる。共通する二五語のうち、「後撰詞書」における単独使用語は一四語と、非常に多いことがわかる。「後撰詞書」の語彙における物語的性格の強さについては、かつてふれたことがあるが[5]、このような「平安和文基本語彙」との共通性の高さは、その一端を示している。

次に、「二条家詞書」に使用され、「三代集詞書」に使用されない形容詞をみると、ここに所属するのは、上記のように、異なり語数で一九語、延べ語数で二三語である。うち、「千載詞書」にのみ使用されたものは、異なり語数で一三語である。同様に、「新勅撰詞書」にのみ使用されたものは三語、「続後撰詞書」にのみ使用されたものは二語、「千載詞書」と「新勅撰詞書」の二作品に使用されたものは一語

今詞書」における異なり語数・延べ語数での品詞別構成比率をまとめたものである。

「二条家詞書」における比率は、「三代集詞書」と比較した場合、名詞の比率が高く、動詞の比率が低くなっている。また、形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の比率をみると、「二条家詞書」におけるそれは、「三代集詞書」におけるそれの、それぞれ七二パーセント（異なり語）、四八パーセント（延べ語）程度しか使用されておらず、その低さが目につく。また、「二条家詞書」における比率を「古今詞書」における比率と比較すると、形容動詞では異なり語数・延べ語数とも近似し、形容詞の延べ語数では「古今詞書」の方がわずかに低い値となるものの、やはり近似しているが、形容語全体で比較した場合、その差は歴然としている。また、「新古今詞書」における比率と比較した場合、名詞・動詞は「三代集詞書」と比較した場合より、その差は小さいことがわかる。また、形容語に関しても、「三代集詞書」の場合ほどではないものの、やはりその差は歴然としていることがわかる。

表２

		名　詞	動　詞	形容詞	形　動	副　詞	連　体	他	形容語
三代集	異	68.6	24.1	3.0	1.4	2.0	0.2	0.6	6.7
	延	59.6	34.3	2.4	0.5	2.0	1.2	0.1	6.0
二条家	異	75.3	17.6	2.3	1.0	1.4	0.2	2.3	4.8
	延	68.7	28.1	1.6	0.2	0.7	0.4	0.3	2.9
古　今	異	68.1	24.7	2.7	0.9	2.6	0.5	0.5	6.7
	延	60.1	34.4	1.5	0.3	1.5	2.2	0.1	5.4
新古今	異	71.8	20.3	2.9	1.4	1.6	0.3	1.7	6.2
	延	67.3	29.0	1.8	0.4	0.8	0.4	0.3	3.4

以上のような点からすると、「三代集詞書」と「二条家詞書」とにおける品詞別構成比率の差は、時代的要因も考慮しなければならないであろうが、同時に、「詞書」の編集態度にも関わっていると思われる。つまり、「二条家詞書」における名詞の比率の高さ、動詞の比率の低さは、「詞書」を動きの少ない、固定的、類型的な、「詞書」本来の性格をより強めたものにしていると考えられる。この点は、形容語の比率の低さという点からも裏づけられるであろう。

3

次に、「二条家詞書」の品詞別構成比率の中で、特異と思われる形容語について、以下、形容詞、連体詞の順にふれることにする。

まず、形容詞についてみたいが、「三代集詞書」において形容詞は、異なり語数で七〇語、延べ語数で三八一語使用されている。また、「二条家詞書」では、それぞれ四九語、二六七語使用されている。うち、共通するものは、異なり語数で三〇語、延べ語数は、「三代集詞書」においては二九八語、「二条家詞書」においては二四四語となっている。したがって、「三代集詞書」にのみ使用されている形容詞は、異なり語数で四〇語、延べ語数で八三語であり、「二条家詞書」にお

表1

		古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	新勅	続後	三代	二条
和語	異	88.7	87.9	77.3	80.6	78.3	78.3	67.7	70.5	65.5	63.4	84.1	66.0
	延	91.3	92.6	78.4	88.3	88.5	84.4	83.4	79.5	75.2	71.5	87.7	78.5
漢語	異	10.3	10.7	20.0	17.2	16.9	19.3	29.6	26.7	31.3	32.6	14.1	31.1
	延	8.4	6.9	20.2	10.9	9.0	14.0	14.9	19.0	23.4	26.3	11.5	19.9
混種語	異	1.0	1.4	2.6	2.2	4.8	2.4	2.8	2.8	3.2	4.0	1.8	3.0
	延	0.4	0.5	1.4	0.9	2.5	1.6	1.7	1.5	1.4	2.2	0.7	1.6

う一般的傾向[1]は、「詞書」の語彙においてもみられることがわかる。

「二条家詞書」を構成する「詞書」の異なり語数における比率をみると、「千載詞書」「新勅撰詞書」「続後撰詞書」が、いずれも「新古今詞書」よりも高率になっていることがわかる。また、それらの「詞書」の延べ語数における漢語の比率をみると、成立の新しい順に高率となっていることがわかる。また、「新古今詞書」と、次の「新勅撰詞書」との差は四・四ポイントと、「詞花詞書」と「千載詞書」との差（〇・九ポイント）や、「新勅撰詞書」と「続後撰詞書」との差（二・九ポイント）と比較した場合、相当大きなものとなっている。この差が、先に書いた、時代が下るにしたがっての漢語増加という一般的傾向の枠内のものなのかどうかは、必ずしも明確ではないが、注目に値する数値であることは確かである。

三

1

「詞書」の語彙における品詞別構成比率に関して、筆者はかつて『古典対照語い表』所載の諸作品と比較し、

1　名詞の比率が高い
2　動詞の比率が低い
3　形容語の比率が低い

のような点を指摘したことがある[2]。「詞書」の語彙におけるこのような傾向は、「詞書」が、

和歌・俳句などの作者・制作の動機・日時・場所・場面・対象・目的、その他前後の事情等について記し、また作品の主題・内容等について説明を加えたもの[3]

であるためと思われる。以下、「二条家詞書」を品詞別構成比率の面からみることにする。

2

表2は、「三代集詞書」「二条家詞書」、および、「古今詞書」「新古

二条家三代集の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、所謂「二条家三代集」の詞書・左注（以下、「二条家詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、いくつかの観点から、その使用実態をみたものである。

「二条家三代集」（「家の三代集」とも）とは、俊成単独撰の「千載和歌集」、定家単独撰の「新勅撰和歌集」、為家単独撰の「続後撰和歌集」の総称で、二条家はじめ中世以降の歌人にとっては「三代集」と比肩する重要なものであった。この「二条家詞書」の自立語語彙を、主として「三代集」の詞書・左注（以下、「三代集詞書」と略称する）の自立語語彙と比較することにより、「二条家詞書」の語彙の特色の一端を明らかにしたいと思う。なお、単位語の取り方については、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院）における認定基準に、おおむね依拠した。

二

まず、詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）の語彙における語種別構成比率についてみることにする。

表1は、八代集および「新勅撰和歌集」「続後撰和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「後拾遺詞書」「金葉詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」「新勅撰詞書」「続後撰詞書」と略称する）、ならびに、「三代集詞書」「二条家詞書」における異なり語数・延べ語数での語種別構成比率をまとめたものである。

表1からは、「三代集詞書」「二条家詞書」における漢語の比率をみた場合、異なり語数で一七ポイント、延べ語数で八・四ポイント、それぞれ後者の方が増加していることがわかる。また、各「詞書」を単独で比較してみると、時代が下るにしたがい漢語の比率が高まるとい